

## 2023 年度人文社会科学部インターシップ実施報告

2000 年度、当時の人文学科によって始められたインターシップは、2017 年度以降、県庁や市役所などへのインターシップを管轄する「公的機関」と、一般企業へのインターシップを管轄する「民間企業」の 2 グループに分けられたが、ガイダンス等については 2 グループ共同で行ってきた。しかし 2020 年度・2021 年度において、世界は新型コロナウイルスの猛威の前に社会全体が封鎖状態に陥り、本インターシップもあえなく休講に追い込まれた。そして 2022 年度に至って、ようやく 4 名の派遣が実現した。その復活の 2 年目に当たる 2023 年度は、3 回に亘る事前セミナーを開催し、そして 5 名の学生の参加を得て実施することができた。ここに至るまでに、事前セミナーの講師を担っていただいた株式会社マイナビ・茨城キャリアサポート課の林佑太先生、本学部インターシップ担当教職員である高井先生、小原先生、学務 G の松岡さん、さらにキャリアセンターの方々からも手厚いサポートを受けたことを、特に記して謝意を表します。

今年度のインターシップの諸活動は次の通りである。

- ① 2023 年 4 月 27 日 キャリアセンター主催によるインターシップ・ガイダンスがオンラインで開催。
- ② 5 月 31 日 学部主催インターシップ参加前セミナー（インターシップの探し方と選考対策）を対面にて開催。
- ③ 6 月 28 日 学部主催インターシップ参加前セミナー（インターシップ参加前の準備）を対面にて開催。
- ④ 7 月 28 日 学部主催インターシップ参加前セミナー（インターシップ参加直前の確認）を対面にて開催。
- ⑤ 8 月から 9 月 インターシップへの参加  
今年度のインターシップ履修者は次の 5 名であった。
  - ・菊池 清華さん（茨城県庁）
  - ・土井 遼平くん（茨城県庁）
  - ・久佐野 翔太くん（水戸市役所）
  - ・岡田 修明くん（ヨークベニマル）
  - ・生井沢 英志くん（株式会社鹿島アントラーズ・エフ・シー）
- ⑥ 11 月 29 日、対面形式によりインターシップ報告会を開催した。参加学生は、派遣先と仕事内容の紹介、感想および反省を詳細に発表し、それに対して担当教員などから質問をするという形式で行われたが、各人のインターシップ経験を十分理

解できた大変有意義な報告会となった。そして参加学生全員から報告書の最終稿が無事に提出された。

以下参加学生が心血を注いで執筆した「インターンシップ報告書」を紹介させていただきます。インターンシップ活動に懸命に励んでくれた5名の「サムライ」の足跡が記されていますので、ぜひお読みください。

最後に本年度の授業をもって、学部「インターンシップ」は休講となります。私自身本授業に携わって10年以上になりますが、様々な経験をさせていただいた本授業に感謝するとともに、いつの日か装いも新たに復活することを心より願って、茲に筆を擱きます。

文責 井澤 耕一

# インターンシップで得られた、日常と違った経験

茨城県庁 農林水産部 農業経営課

人間文化学科2年 菊地清華

## 1. 参加の動機

今回、数ある公的機関の中でも私が茨城県庁のインターンシップに参加しようと考えた理由は2つある。1つ目は、今年の春季休業中に今回のインターンシップとは別のインターンシップに参加していたことが関係している。その中で茨城県庁を訪れる機会が数回あり、主に県議会を中心に茨城県庁の内側を見ることができた。そこで今回は、他の部署はどのような業務を行っているのか、そして茨城県庁での働き方についてなど、前回は機会の得られなかった点について知りたいと考えた。2つ目は、公務員の現場を直接見たいということだった。私は将来の就職先の希望がはっきりとしていないため、できるだけ多くの職場を見てみたいと考えていた。公務員は興味のある職種の一つであったが、実生活で直接関わる機会のある公務員は、市役所職員や、警察官などが主だった。それらとは違って、住民と直接的な関わりの少ないであろう県庁職員が普段どのような業務を行っているのか、インターンシップに参加することで知ることができると考えた。加えて、茨城県庁の中でも農林水産部を希望した理由がある。それは今年度前期に、農学部の先生方による「農学入門」という授業を履修する機会があり、日本や茨城県の農業の特徴と現状、課題点等について学ぶことができたことにある。このことをきっかけに、茨城県という単位としてはどのように農業に関わっており、農業者を支えているのかについて興味を持った。茨城県庁の組織の中では、農林水産部でこれらについて知ることができるのではないかと考えた。

## 2. 派遣先の概要と業務内容

今回は1日目のオンラインでの全体研修と2日間の本庁研修であった。今回私が配属された農業経営課は、農業を営むにあたって必要となってくる基盤部分を支援・指導する役割を担っている。具体的には、農業協同組合や農業共済組合等の指導や農業制度資金に関すること、耕作放棄地対策、農業経営改善の普及、企業の農業参入支援、新規就農者の確保に関することなどが挙げられる。この課は、団体・金融担当、基盤強化担当、就農・農業参入支援担当の3つのグループに分かれており、先述した業務を分担して行っている。今回のインターンシップでは、2日目に茨城県の農業の概要を説明していただき、その後各グループの業務について紹介を受けた。午後には基盤強化グループの出張に同行させていただき、高萩市で行われた国・県・市の職員が出席する「最適土地利用総合政策」についての会議に参加した。3日目には、2日目に説明していただいた業務をさらに掘り下げて説明していただくとともに、農業経営課の若手職員の方と座談する機会を頂くことができた。

## 3. インターンシップを通して修得したこと

今回インターンシップに参加したことで、初対面かつ自分とは全く違った立場・年齢に相当する人々とコミュニケーションをとることができた。それにより社会人として必要なマナーや、言葉遣いについて学ぶことができた。特に名刺交換や会議前の相手方との挨拶は、実際に社会人になってみなければその雰囲気を感じることは難しいため、非常に貴重な経験となった。また今回私が配属された農業経営課は、茨城県の農業と、農業従事者を支える役割を担うところが大きかった。私は普段、農業王国・茨城県の消費者として恩恵を受けている立場にあったが、それがどのような仕組みによって支えられているのか、そして県庁職員はそれを支えるためにどのような仕事を行っているのかについて知ることができた。

## 4. 後輩へのアドバイス

大学生は今までの学生とは違い、自由度が非常に高くなったことは様々な場面で感じると思う。一方で自己の責任がそれに付随するとともに、自ら積極的に行動しなければ何も始まらないという点は大きい。言わずもがな、今回のインターンシップもそのうちの一つである。単に自分の将来についてのビジョンを明確にすることができたり、就職活動の糧となったりするだけではなく、普段生活している世界とは違ったものを見ることができるのは、自ら行動を起こした人のみが得られるものである。インターンシップをはじめ、少しでも興味の持ったものには取り組むべきだと考える。

# 県民と直接関わる県庁の仕事

茨城県庁 産業戦略部 技術革新課

現代社会学科3年 土井 遼平

## 1. 参加の動機

私は県庁の業務内容を直接見ることによって、自分が考えている県庁の仕事はどの程度合っていて、どの点が違うのかを確かめたいと考え、インターンシップに参加した。そして自分のイメージと実際の仕事とのギャップを知ることによって、自分の軸に合うかの確認や業務への理解度の向上といった利点を得られると考えた。それらの利点によって面接などでの受け答えにおいて説得力を出すことができ、また、経験をもとに話せるエピソードが広がるといった好影響があると考えた。

## 2. 派遣先の概要と業務内容

私は茨城県庁の中でも経済的な仕事を行う産業戦略部・技術革新課という部署を見学させていただいた。この課は地域産業の振興などを担う地域産業振興室、予算の執行や決算・監査などを担う管理・調整グループ、スタートアップ支援などを担うイノベーション創出グループ、中小企業の支援などを担う技術革新支援グループの4グループから構成されている。

今回のインターンシップはオンラインでのガイダンスと2日間の対面実習を合わせた計3日行われた。初日のガイダンスでは茨城県庁全体の仕事内容についての説明や先輩職員の方のお話などを伺った。2日目は午前中に地域産業振興室の業務を体験するために笠間市の採石場への出張に同行した。そこでは県から事業の認可を受けている採石場がルールの中で安全に運営されているかの確認を行った。ヘルメットを着用し実際に採石を行う場まで行き、企業の方とコミュニケーションを交わした。午後はイノベーション創出グループの業務を体験するためにつくば市を訪れ、ベンチャー企業の会議にオブザーバー参加させていただいた。そこでは司会や受付などで会議の運営に携わる職員の方々を見学した。3日目は技術革新支援グループの業務を体験するために茨城町の産業技術イノベーションセンターに行った。そこで施設にある食品を加工する機械や3Dプリンターの見学、VRの体験、高精度顕微鏡の勉強会など多岐分野にわたる説明を受けた。また、この施設が儲けになるか分からず民間企業が手を出しにくい分野に県が出資したり、一つの中小企業が購入することは難しい高額な設備を県が購入し高い技術力を持つ中小企業に貸し出ししたりする施設であるとの説明を受けた。最後に県庁の庁舎内で課長とお話をする機会もいただき、インターンシップが終了した。

## 3. インターンシップを通して修得したこと

1つ目は県庁の仕事に対するイメージの変化である。県庁の仕事はデスクワークがほとんどで、事務的な仕事が大半を占めていると想像していた。しかし実際に業務を体験して、出張や出先機関での仕事が多くあることを知った。これまでは市民や県民と直接関わるのは市役所というイメージを持っていたが、県庁でも県民と直接関わり、やりがいを感じる場面が多くあると分かった。また、直接に関わりがなくても、産業技術イノベーションセンターのように、自分の仕事で県民の生活の質向上につながると感じられる機会はあると感じた。

2つ目は就職活動への理解だ。出張に同行させていただいた際に、移動中の車内で様々なお話を伺うことができた。公務員の試験勉強についての話や、面接の様子などを聞くことができ、今後の就職活動の流れを感じることができた。

3つ目は社会人としての心構えだ。これまで社会人の方とメールのやり取りをしたことやお会いすることがなかったため、一つひとつの言動や身だしなみに気を使って過ごす貴重な機会となった。この経験によって就職活動が本格化した時に抵抗感を感じることなく、スムーズに行うことができるようになったと感じる。完璧に修得できたというわけではないが、実際に体験をしなければ得ることのできない知識や心構えを今後しっかりと自分のものにできるようにしたい。

## 4. 後輩へのアドバイス

インターンシップは申し込みや準備が大変、緊張するといった理由から消極的になってしまうことがあると思う。しかし実際に参加してみると、現場で直接関わるからこそ気付くことや感じる雰囲気があると分かった。受け入れ先の方も気さくに接してくださるので、そこまで気負いすぎることなく、現場を見てみるという目的で参加することもありだと感じた。参加によってマナーなどを学ぶ機会にもなるなど多くの学びがあるためインターンシップには積極的に参加した方がよいと考える。

# 直接訪れることで得られた経験と良き出会い

水戸市 産業経済部 農政課

現代社会学科・3年 久佐野 翔太

## 1. 参加の動機

初めに、水戸市農政課のインターンシップに参加した理由は、市民との距離が近い市役所の業務を直接体験したいと考えたからである。また、行政系の公務員への就職を考える中で、国や都道府県の広域的な業務とは異なる特性を持つ市役所の仕事について深く知りたいと考えたからである。次に、水戸市の中でも農政課を選んだ理由は、「食と農」の分野に興味を持っており、現在、農業従事者の減少や食料自給率の低さなどの課題がある中で、市役所としてはどのような対策や取り組みを行っているか学びたいと考えたからである。

## 2. 派遣先の概要と業務内容

私は、水戸市産業経済部の農政課に今回のインターンシップでお世話になった。農政課は、主に企画係、振興係、振興係水田チームに分けられる。企画係では、農業基本計画に関する内容、農業振興地域整備計画に関する業務、森林保全整備及び林業に関わる内容が取り扱われている。振興係では農業担い手の確保及び育成に関することや新メガファーム事業の推進、農用地の集積及び集約化に関する業務が行われている。振興係水田チームでは、水田農業の振興に関することや経営所得安定対策の推進に関することが行われている。

次に、3日間のインターンシップで経験した業務について述べる。1日目は、企画係の職員にそれぞれ業務の説明や水戸市における農業基本計画についての説明を受けた。その後、企画係の職員と同行し、水戸市の森林公園におけるナラ枯れの調査をドローンを用いて行った。さらに、全国育樹祭で用いられるプランターづくりを体験した。2日目の午前中は、振興係の水田チームに同行し、経営所得安定対策に関する説明を受け、水田転作の現地確認を行った。午後は、水戸市が推進している納豆を利用したPR活動の推進事業に関わる、納豆を包むわらの整備を行った。3日目は、6件の新規就農者の圃場に訪れ、経営の状況や農作物の生育の状況を、振興係の職員と県庁の技術者と共に確認した。

## 3. インターンシップを通して修得したこと

第一に、今回のインターンシップを通して市役所の具体的な業務について知ることができた。市役所としては、国が作った法律や方針に基づき、市民の一番近くで規制や申請への対応を実行しているため、行政が政策を実行していく上で重要な役割を担っていると考えた。また、農政課においては新規就農者の方々に対して補助金などのサポートを行っており、市民と直接コミュニケーションを取りながら仕事を行うことへのやりがいを感じた。

第二に、職員の仕事内容が一人一人異なり、ある程度の裁量を持ち業務を行っていることが勉強になった。職員が自分の担当する業務について責任を持ち、法律などの勉強を行いながら仕事に取り組んでいることが印象に残った。また、職員同士が協力しながら問題を解決していく姿も見ることができた。この点からは、職員になってからも学び続けることの大切さやコミュニケーション能力の重要性を改めて考えることとなった。

最後に、市役所で働く方々への印象が大きく変わった。1点目は働き方についてである。庶務の方から職員の有給取得について説明していただいたが、1時間単位での有給や男性の産休、子どもの送り迎えのための時差出勤などがあり、とても働きやすい環境であることを新しく知ることが出来た。2点目は、市役所で働く方々の温かさである。私は、農政課でインターンシップを行ったが、職員の方一人一人に優しく接していただいたことや、様々な質問に対しても丁寧に答えていただいたことが特に印象に残っている。また、忙しい中、一人一人の職員が担当している業務についても説明していただき、私もこの場所で一緒に働きたいと考えるほど有意義な3日間を送ることができた。

## 4. 後輩へのアドバイス

今回のインターンシップでは、農政課で働く職員の温かさや職場の雰囲気の良さが印象に残っている。昨今は、オンラインでの説明会などで情報を得ることが容易になったが、直接訪れることでしか経験できないことや、新しい人との出会いはかけがえのないものである。また、インターンに積極的に参加し自分の視野を広げてほしいと考える。

# 生の販売体験・お客様に寄り添う小売業

ヨークベニマル御幸ヶ原店

現代社会学科3年 岡田 修明

## 1. 参加の動機

私はコンビニエンスストアでアルバイトをしており、アルバイトを通じて多少なりとも接客という仕事の経験を積み重ねてきた。また、アルバイトでの経験を積み重ねていく中でコンビニエンスストアとスーパーマーケットの役割の違いについて考えるようになり、店舗の規模や扱っている商品、そして店員の数などにおける両者の違いについて高い関心をもつようになった。そこで職場がスーパーマーケットであり、実際に販売を体験することができるというこのインターンシップに参加することで、商品の売り方という観点から自身の関心や疑問について深く考えてみようと思った。

## 2. 派遣先の概要と業務内容

今回はヨークベニマルの御幸ヶ原店にお世話になった。ヨークベニマルはいわゆるドミナント戦略で北関東エリア・福島県・宮城県を中心に店舗を構えるスーパーチェーン企業である。全国展開を基本とするコンビニとは違い、スーパーが地域を絞って展開することには地域生活とのつながりを重視するという意味がある。他にも地域生活重視の戦略はいくつもあり、例えば地域ごとに力を入れる商品のラインナップを変えたり、売り上げに応じて商品の配置を変えたり、地元向け児童教育施設への出資などに取り組むことなどが主な戦略として挙げられる。

今回はインターンシップ参加者のために用意されたスペシャルプログラムに従事した。具体的には、参加者同士で協力して福袋を作成し、それらを実際にお客様向けに販売するという業務であり、福袋作成にいたっては最初から最後までインターンシップ参加者の力量に委ねられた業務となっていた。業務を進めるにあたり、まずは店内で販売している商品を吟味し、自分たちが良いと思う原型を立案した。続いてお客様へのアンケート調査を実施し、この店に訪れる人たちの買い物の傾向を分析して立案した原型の修正を行った。そして、販売時に用いるポップアップ等を作成した上で販売も担当した。販売においては実演販売も体験し、販売促進のための店内放送の活用も体験した。

## 3. インターンシップを通して修得したこと

福袋に入れる商品の選ぶ段階においては、私は醤油やみりん、麵つゆといった汎用性の高い調味料のセットを提案した。これに対し担当の社員は「重さに気を配ると良い、もっと視覚的に彩りのある商品の選ぶと良い」とアドバイスしてくれ、自身にはまだスーパーマーケットの顧客がどのような心情で商品を選ぶのかという視点が足りていなかったことを気付かされた。さらに、実演販売の現場では声を張り上げたり、店内放送を繰り返すことで大々的な宣伝を試みたが、自身の期待に反して積極的にこちらに興味を示してくれるお客様が少なかったように感じた。これはチラシや公式サイトといった媒体を介した事前宣伝が行われていないことが原因だと担当の社員は説明してくれ、スーパーマーケットで商品を守るための宣伝の技術を学んだように感じた。

スーパーマーケットという職場におけるインターンシップでは、コンビニエンスストアでのアルバイトという立場ではあまり考えることがなかった領域、すなわち宣伝や商品ラインナップ、そして販売方法といった売上げに直結する深い領域についても自身で考える機会を得ることができた。これは自分にとっては非常に新鮮な体験であり、あらゆる部分における業務内容を時期や地域に合わせてレイアウトするというスーパーマーケットの特性を理解することができた。

## 4. 後輩へのアドバイス

今回のインターンシップで私が担当した業務は、普段はパートやバイトでは担当することのできない正社員向けのものであり、その特徴は自身の考えを商品の並べ方やラインナップに反映させられる点にあった。また、今回のインターンシップでは参加者と担当者間でのコミュニケーションが実際の販売に直結するような緊張感のある業務も用意されており、社会人を目指す時期の学生にとっては大変貴重な経験になった。このように、インターンシップでは実務を通して自分の想像できなかった仕事の実態を知り、社会人としてのコミュニケーション能力を学ぶことができる。インターンシップに参加することで社会に出る前に経験しておくべき数多くのことを経験できるため、積極的に参加することを勧める。

# プロスポーツチームの実態 鹿島アントラーズの地域活動を知る

株式会社鹿島アントラーズ FC

現代社会学科3年 生井沢 英志

## 1. 参加の動機

私が鹿島アントラーズを選んだ理由は、自身のスポーツとアントラーズへの情熱に加え、スポーツビジネスという環境の中で学び成長したいと考えたからである。私はスポーツに興味があり、ゼミでもプロスポーツに関する研究を進めており、将来的にはスポーツに携わる仕事をしたいと考えている。今回はスポーツビジネスの一環として展開されている地域貢献活動を体験し、地域に根差したスポーツビジネスや地域スポーツ活動を通じて、スポーツと地域社会の結びつきについての理解を深めたいと考えインターンシップに参加した。また、スポーツビジネスという環境での学びと成長はゼミでの研究をより深化させることにつながり、さらには自身のキャリアを発展させることができるのではないかと考えた。このインターンシップは、私のスポーツ愛とアントラーズ愛を具体的な挑戦に変え、スポーツと地域社会の結びつきを学ぶことのできる素晴らしい機会と捉えた。

## 2. 派遣先の概要と業務内容

鹿島アントラーズは、茨城県鹿嶋市を拠点とするプロサッカークラブであり、1991年の創設以来、国内外にて数々のタイトルを獲得している強豪クラブである。鹿島サッカースタジアムを本拠地とし、地域社会への貢献にも力を入れており、その独自のクラブ哲学と結びついた強力なサポーターベースを有している。また、茨城大学とは学術連携を結んでおり、茨城大学の社会連携センターでは鹿島アントラーズ連携事業学生サポーターが結成され、様々な活動が行われている。

インターンシップ中はクラブ内の地域連携グループで活動を行った。地域連携グループの主な仕事は、地域行政等と協力した行政連携や地域企業へのセールスである。今回のインターンシップでは特に行政連携チームでの活動が多かった。

私が行なった業務内容は主に3つである。1つ目は行政連携チームが行う教育活動や市町村行政との連携業務への同行と協力である。ここでは鹿嶋市招待試合に向けてポスターやチラシを配布したり、食育キャラバン活動の一環として小学校を訪問したり、スタジアムにて中学生の職場体験の受入れを行なった。

2つ目は鹿島アントラーズ内の各グループやチームが行う業務を学ぶことであった。ここでは各業務がチームの目指すビジョンとどのように関係し、それらの業務が実際にどのようにクラブや地域に貢献しているかなどを学んだ。

3つ目は試合日に向けた準備と試合日のイベント運営であった。具体的には、J1リーグ2023シーズン第28節、横浜F・マリノス戦において警察車両や自衛隊車両などを展示した「働く車ブース」という場外イベント業務を担当し、列整理や整理券配布、写真撮影補助などを行なった。また、前日にはイベントの準備等を担当し、試合後にはキッズイベントの写真撮影の手伝い等も行なった。さらに、第29節の浦和レッズ戦に向けたイベントの準備や本山雅志選手引退試合に向けた準備等も担当した。

## 3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップではまさに私が高い関心を寄せるプロスポーツビジネスの中でもプロスポーツクラブが行う地域貢献の職場を体験することができた。プロサッカーのファンとしてクラブを外から見ているだけでは分からない苦労や細かい作業を体験することができた。インターンシップを通じて、アントラーズは小中学生や地域行政の方々と連携した様々な活動を展開し、地域の人々の生の声を聞くことで、地域に根差したクラブとなっていることを実感した。そして、地域に根ざしてこそプロスポーツチームは成立するということを実感し、地域貢献活動の重要性を理解することができた。

## 4. 後輩へのアドバイス

J1リーグでも多くの実績を残してきた鹿島アントラーズというプロサッカークラブでのインターンシップを通じて得た経験は素晴らしいものであった。今回のインターンシップを実現することができたのは、ゼミの指導教員である加藤敏弘先生やインターンシップを授業として開講してくださった井澤耕一先生をはじめとした先生方のご尽力とご支援のおかげであり、心より感謝申し上げたい。

後輩にはぜひ自分の興味のある分野でのインターンシップに挑戦し、参加することではじめて見える側面や感じることのできる雰囲気や体験してほしい。また、インターンシップに参加することをゴールとはせず、参加することで得た体験や学んだことを大学での授業や自らの研究、そして大学卒業後の人生やキャリアに繋げると強く意識することが、イン

ターンシップへの参加の意義を深めると考えている。